

[005_1980]第五回中央図書館貴重文物展観目録：石 崎文庫

九州大学附属図書館中央図書館

中野，三敏
九州大学文学部：助教授

<https://doi.org/10.15017/1485002>

出版情報：大学広報. 386, pp.1-8, 1980-10-06. The Committee of Public Relations Kyushu University
バージョン：
権利関係：



大学広報

No. 386

昭和55年10月6日発行

(編集)
九州大学広報委員会

第五回中央図書館貴重文物展観目録

(中央図書館)

は し が き

中央図書館では本館所蔵の貴重な学術資料を、特定のテーマを選んで逐次展観していますが、このたびその第5回として、「石崎文庫」の一部を下記のとおり展観することにいたしました。

「石崎文庫」は故石崎又造氏(東京帝国大学附属図書館司書)の旧蔵コレクションであり、昭和54年度に御遺族の厚志により、また文部省の大型コレクション予算配分をも得て、当館の架蔵するところとなったものであります。

教職員や学生諸君が多数来観されるよう希望します。

なお、展示本の選定、解説、配列等については、文学部中野三敏助教授に多大の御尽力と御指導を頂きました。ここに厚く御礼申し上げます。

記

場 所：中央図書館メインロビー

期 間：10月6日(月)から12月20日(土)まで



石崎文庫展観資料の解説

唐話学書二、三

石崎文庫は故石崎又造氏の文庫に命ぜられた名称である。氏は九州筑後に生れ、久しく東京帝国大学附属図書館に司書として勤務される間、日本における唐話学の沿革に関する研究に従事され、「近世日本に於ける支那俗語文学史」(昭和15年 弘文堂刊)と題する名著を公刊された。こゝに展示するものは凡てその研究の資として座右に置かれた書物の中から選び出したものばかりである。氏は戦後九州に帰られ、福岡の西、姪の浜愛宕社の麓に一家を構えられ、その地に没されたが、未亡人石崎みつ女史は、その蔵儲の凡てを九州大学へ移譲せられ、この度の展観となったものである。

尚石崎氏の「近世日本に於ける支那俗語文学史」は既に刊行以来殆んど半世紀を迎えようとしている今日に於いて、なお、この分野に於ける唯一無二の業績であることをこゝに附記しておく。

第 1 - 第 1 0 迄は享保 1 3 年刊

第 1 1 - 第 2 0 迄は宝暦 9 年刊

本書は李卓吾批評百回本を原本として、それに岡島冠山が訓点を加え、和刻(唐本を日本で翻刻したものの称)したもの。第 2 0 回迄を享保 1 3 年と宝暦 9 年の二度にわたって翻刻したが、2 1 回以後は未刊に終わった。

底本に用いた李卓吾評本は中国にも数種あって容興堂本や芥子園本等がしられるが、冠山が用いたのは右の二本とも異なる別本であったようである。冠山は更にこの書の翻訳も企て、それは宝暦 7 年と寛政 2 年に 4 7 回迄が刊行されている。冠山のこの業績は日本に於ける中国俗語文学の流行の口火を切ったものとして有名である。

冠山は長崎の産、その伝の詳細は今以てわからないが、唐話の才能は当時に冠絶しており、宝永末年から江戸で、享保半ばからは京で共にその地に唐話学の端緒を開き享保 1 3 年、55 才で京に没した。

2 忠義水滸伝 第 1 - 第 1 0 大本 2 冊

本書は 1 と同じ本であるが、本文に三種の書き入れが施されており、黒は知恩院坊官榎田安房守、朱は風月庄左エ門 藍は陶山南涛の著「水滸伝訳解」の説をそれぞれ記したものである。当時の上方に於ける唐話学者の研鑽ぶりを具体的に示す資料として甚だ貴重である。

風月庄左エ門は京都の本屋風月堂の主人で沢田一斎と称し、天明 2 年 8 2 才で没している。岡白駒に唐話を学び、宝暦以降の京都唐話学界をリードしていた。

榎田安房守は名を直猷といひ、従六位下に任ぜられ天明 2 年 5 2 才で没した。唐話を沢田一斎に学び、白話風の小説「春嶮折甲」の著がある。

陶山南涛は伊藤東涯門の唐話学者で「百廿回本水滸伝」の語釈を試み「水滸伝訳解」を刊行した。その生没年は不明であるが一斎よりはやゝ後輩に当る。

3 忠義水滸伝解 第 1 - 第 1 6 小本 1 冊

陶山南涛著 宝暦 7 年刊

本書は「百廿回本水滸伝」の語釈を試みたもの。その第 1 から第 1 6 迄が、このような形で刊行された。尚、南涛は「水滸伝訳解」と題するもう一つの語釈も残しており、2 に引かれたのは「訳解」の説である。

本書は本屋を異にする二種があり、こゝに展示したのはその再摺本に当る。

- 4 小説精言 半紙本 4 卷 5 冊 寛保 3 年刊
 小説奇言 半紙本 5 卷 5 冊 宝暦 3 年刊
 小説粹言 半紙本 5 卷 5 冊 宝暦 8 年刊

右の三書を一括して「小説三言」とも言う。「精言」「奇言」は何れも岡白駒の著。「粹言」は門弟沢田一斎が業をついだもの。何れも一斎の風月堂から刊行されている。内容は唐土の所謂「三言二拍」即ち馮夢龍編の「喻世明言」「警世通言」「醒世恒言」及び、凌蒙初編の「初刻拍案驚奇」「二刻拍案驚奇」以上 5 編の短編白話小説集から 14 話を抄出し句読訓点を施し、傍訓を加えたもの。この和刻三言の出現は、我国の小説界に新風を吹き込み、以後三言に材をとった都賀庭鐘の「英草紙」等の刊行を見て、新しい読本の時代を迎えることになる。

岡白駒は本姓岡部、肥前蓮池侯の儒臣。明和 4 年 7 6 才で没する迄、京坂に於ける唐話学の領袖の地位を冠山から受けついで君臨した。

- 5 唐話纂要 半 6 卷 1 冊 享保 3 年刊 岡島冠山著

本書は初め享保元年に江戸で 5 卷 5 冊本として刊行され、更に享保 3 年に卷 6「和漢奇談」の 1 卷を加えて再刊された。ここに展示したのはその再刊本である。

内容は一般的な唐話入門書で同類書の内では江戸時代最も広く読まれたものといえる。著者冠山が徂徠の一門の訳社の為に教科書代りに編んだものであろう。巻 1 から 5 までは 2 字から 6 字程の語句を分類別に掲出して音及び釈を施し、巻 6 は 2 章の小説を白話で記し、後に訳文を附す。この 2 章の小説は恐らく本邦人の手によって書かれた白話小説の最初のものといえよう。

展示した本書は蔵書印に「可軒池田氏蔵書記」とあって、岡山藩井原の邑主池田可軒の旧蔵本である。可軒は幕末多事の折外国奉行として活躍した異才であった。

- 6 唐話便用 半 6 卷 3 冊 享保 2 0 年刊 岡島冠山著

本書は初め享保 1 0 年に京で刊行され、更に同 2 0 年再刊された。展示したのは再刊本である。内容は 5 と同じく、日用の唐話を列記して四声と訳を施したもの。やはり唐話教科書

としてよく用いられたものの一つである。

7 俗語解 写本半4冊 沢田一斎編か。

小説伝記類の俗語をイロハ分けに配列して注解を加えたもの。注解には引用書名を記した上編者の説を加える。説明は詳細で同類の書の中でも質量ともに抽んでる。引用書目中には「小説奇観」「照世杯」等の稀書も見え、陶山南涛、岡白駒、東涯、徂徠等の言説を引くことが多い。傍もって石崎氏はこの書の編者を一斎かとしておられる。

8 小説字彙 小1冊 寛政3年刊 秋水園主人編

小説類からの俗語の集釈で一般の漢和字書と同じく畫引きになっているのが字書としてかなりこなれた感を与えており、唐話学流行の度合いを如実に示している。更に本書の特色は巻頭に附載された「援引書目」の豊富さにあり、実に160種に及ぶ小説類を列記して、その中には未だにその存否未詳のものが少なくない。編者秋水園主人は大阪の崎人高安芦屋かといわれているものの尚明らかではない。

9 三字唐話 写、半1冊 江戸後期写

唐話字書の一。三字の唐話を集め、唐音と釈を附す。巻末には50程の蘭語も記されその内容は医学用語が多いので、本書の編者も医学書生の1人ででもあろう。江戸後期における唐話学と蘭語学が基盤を1にすることを図らずも示した好資料であるようにも思われる。

10 遊囃社常談 大2巻1冊 明和7年刊 石川金谷著

本書は5の「唐話纂要」等と同じく「遊囃社」なる唐話学の結社の為に作られた教科書の如きもの。上巻に2字、3字話、下巻に長短話、話説を集め音釈を加える。

石川金谷、名は貞、字は太一。伊勢菟野の人、宝暦年間長崎に遊んで唐話に通じ、遊囃社は彼を盟主とする結社であろう。後に延岡藩儒となる。

1 1 雑纂訳解 大本4巻1冊 宝暦12年刊

岡白駒著 式亭三馬旧蔵

唐話学の流行は我国の文芸に多大の影響を与えたが、その見逃してはならぬ一つに支那笑話の翻訳の流行があり、江戸戯作に大きく影響した。本書はその比較的早い年代の一。

唐の李義山作といわれる「雑纂」は短句よく人の肺腑を突く諷刺文芸の傑作と称され、「枕草子」等もその摸倣といわれてもいるが、その訳解を試みたもの。旧蔵者式亭三馬はその著「浮世床」二編に多くの支那笑話を下敷きにした滑稽を点綴しており、本書からも「殺風景」中の「花下曝褌、妓筵説俗事」の二項をかすめとっている。

展示した部分、右の二項に朱点がふってあるのは、三馬の手澤である。

1 2 咲堂福聚 大本1冊 享和4年刊 山本北山著

支那笑話の翻訳は更に進んで、原話の翻案による漢文笑話の創作の流行を見る。

本書はその一で当時儒学の大家山本北山の手になるもの。主として「笑府」「笑林広記」等に材をとって翻案し、間々北山一流の詩文観をも吐露する。

漢文笑話創作は漢文の作文楮梯といった意味で書生間に大流行したものらしい。

1 3 華間笑話 写本半1冊 文化5年序 三村其原著

本書もまた漢文笑話創作の一であるが、その取材範囲はかなり広く「笑府」「笑林広記」等の支那笑話は勿論、更にそれを翻案した本邦人の著作「笑話出思録」「胡廬百転」等を始め、純然たる本邦笑話「昨日は今日の物悟」や「醒睡笑」等からも拾っており、又その笑話としての出来栄も優秀なものが多い。

三村氏その人については未詳。

1 4 江湖歴覽杜騙新書 半1冊 文政元年刊 石川金谷著か

本書は明の張応愈著の騙術小説「杜騙新書」の中から17話を抜いて和訓を施したものの。原本は大坂の木村葦葭堂蔵本に拠ったという。明和7年に初板が出、文政元年に再刊された。展示したのは再板本である。また明治になって河原英吉による本書の訳解もある。騙術や詐欺を主題とする小説は裁判物の「業陰比事」等と共に支那小説の一ジャンルをもなしている

が、本邦でも本書等の訓訳を通して親しまれ、馬琴の読本には本書の利用の跡が指摘されてもいる。

15 日本忠臣蔵 1回—10回 半3冊 文化12年刊

清 鴻濠陳人訳

本書は別名を「海外奇談」ともいう。内容は浄瑠璃の「仮名手本忠臣蔵」を章回小説のスタイルに倣って俗語訳したもの。文化12年に刊行されたが、展示したのは明治になって重版されたものである。

訳者鴻濠陳人は「忠臣蔵」の支那訳を市中に得て補訂したと序に述べるが、恐らくその清人というのは仮称で、序を書いた亀田鵬斎その人の悪戯ではないかといわれている。

浄瑠璃の俗語訳は既に明和に「四鳴蝉」、安永に「阿姑麻伝」が刊行されており、本書の後も天保に「櫻精伝奇」の刊行を見、明治に入っても「艶華文叢」等がある。

16 和唐珍解 小本1冊 天明5年刊 唐来参和著

洒落本はその発生期からして漢文学とは切り離せない関係を有していたが、宝暦明和期には、支那趣味を最も濃厚に漂わせた戯作となって存在していた。本書はその趣味の極まったもので、長崎丸山の遊廓に於いて、唐人が通事を連れて遊ぶ情景をそのまま一編の主題としたものであり、唐話をそのままに用いている。

17 通俗孝肅伝 半5巻5冊 明和7年刊 紀瀧洵著

本書は支那の裁判小説集「龍凶公案」の中から短編5種を選んで抄訳したもの。原本を原文のまま漢文で記して左右に唐音や和訓をつけるのが通常の訓訳本であるが、更にそれを国字に和訳して読み易くしたのを「通俗」ものといひ読本の下地を作ることになる。従来京坂で刊行されることの多かった通俗ものの流行が漸く江戸へ移行するその口火を切ったのが本書等である。

18 板橋雑記 半2冊 明和9年刊

清 余澹心著 日本 山崎蘭齋訳

南京の秦淮は明清の文人が歎を尽した紅灯の巷であるが、そこに生きた明代の名妓の列伝を中心として、その風物を記したのが本書の原本であり、それに大坂の町儒者山崎蘭齋が訓点を施したのが本書である。明和末年といえ、上方における支那趣味が頂点に達した時期であり、その艶麗優美な面のみを摘出した如き本書はその板本としての出来栄も見事で、当時の文人趣味の一典型とでもいえる様な姿である。

本書は洒落本にも大きく影響して好評であったと見え、享和3年、文化11年と板を重ねるが、展示したのはその初板本である。

後年成島柳北は徳川幕府の遺民としての自己を本書著者の余懐による明朝思慕の念と重ね合わせて、有名な「柳橋新誌」を著作することになる。